

中国文化と異文化コミュニケーション

高 31 期 松村茂樹氏（大妻女子大学教授）



私は今、都内の女子大学で中国文化論担当の教員をしています。私の所属するコミュニケーション文化学科には、中国語を第1外国語とする中国語専修があり、使える中国語を身につけた上で、中国を理解し、良好な国際関係を構築できる人材を育成しています。この学科はまだ設立5年目を迎えたばかりですが、すでに国費留学に2名が合格し、大手都銀中国営業推進部で活躍している卒業生もいます。

日本の貿易相手国として、中国圏は第1位になりました。今後、中国との関係はより重要になっていくでしょう。就職したら、職場には中国語が飛び交い、取引先は中国企業がほとんど—といったことがもうめずらしくないのです。

そこで必要となるのが、異文化コミュニケーションです。これは 中国語が話せるということだけではありません。

相手を理解していないと、真のコミュニケーションは行えないのです。中国を理解するには、中国の文化を学ぶのが最もよいと私は考えます。

古今の書物を読み、書画を愛で、映画を観て、できれば実際に中国の風物に触れ、人々と語りあえればもっといいでしょう。文化とは、文(あや)つまり、いろどりされたすばらしい状態に化していくことです。

中国には、この人間がすばしくなろうとする営みの蓄積が豊富です。

これを学ぶことこそ、遠回りのようで、実は理解への王道でしょう。

最近、中国の反日感情が憂慮されていますが、私は「前よりはいい」と思っています。私が中国に留学していた 1983 年、「精神汚染打破運動」が起こり、西側の「精神汚染」を備えているとして、日本人の私には挨拶も返してくれなくなった人がいたりしました。そんな中、いつも通り接してくれた教員や学生には中国の大人(たいじん)を見る思いがしたものです。

今の中国には、「文化大革命」や、私の経験した「精神汚染打破運動」といった国民を扇動する大きな政治キャンペーンはありませんし、人々は扇動されるのではなく、自ら考えるようになっています。そうになると、おのずと一部には「日本はきれいだ」などという意見も出てくるわけです。でも、これは無思考のまま扇動される状態より、はるかにいいのではないのでしょうか。



中国では、今、異文化コミュニケーションとして、日本を理解しようとしています。村上春樹を読み、「白い巨塔」を観て、J-POPを聴く若者も増えています。日本でも、チャン・ツイイーに憧れ、華流ドラマを観て、三国志ゲームに興じる若者がいます。こういった若者たちが、相手に対する理解を深め、必ずやよい方向を模索してくれることでしょう。

私も教員として、中国文化研究に励み、その成果を伝えつつ、よりよい異文化コミュニケーションができる学生を育てればと思っています。